



London
The History of Red and Blue

田邊雅之＝文
text by Masayuki Tanabe

宮原一郎＝写真
photographs by Ichiro Miyahara

永川智子＝写真
photographs by Tomoko Nagakawa@Vis-a-Vis Production

山中忍＝コーディネート
coordination by Shinobu Yamanaka

Arsenal

Modernism

[チャップマンからベンゲルまで]

ハイバリー90年の物語 「アーセナルに息づくモダニズム」

知将ベンゲル監督の下で華麗なサッカーを繰り広げるアーセナル。
「退屈でつまらない」と酷評された時代は、遠い過去のものとなった。
しかしクラブの歴史に精通したファンは、当然の帰結だと胸を張る。
彼らの言葉は嘘ではない。今から約70年前、1930年代の「ガナーズ」では
ベンゲルに勝るとも劣らない名将が君臨し、黄金時代を築き上げていた。

ロンドン市内北東部、ピカデリーラインのアーセナル駅に降り立つ。タルコフスキーの映画に出てくるような無機質な地下道を抜けると、寒々とした住宅街に出る。

立ち並ぶ集合住宅は、壁の漆喰が剥けていたり、狭い中庭にゴミが放置されているところが多い。外壁を塗りなおした物件や、窓に小さな花瓶を飾っている家庭もあるが、全体から受ける印象は、この地域が決して豊かではないことを物語っている。ブティックや高級ホテルが軒を連ねる繁華街とも、パッキンガム宮殿やビッグベンが醸し出す荘厳な雰囲気ともまるで違う、時代から取り残されたロンドンのもう一つの顔だ。

駅を後にして歩き始めると、程なくして朱色の鉄製の扉の前を横切る。扉には大振りな茨を連想させる鉄条網と、ノーススタンドの入り口であることを示す看板がついている。

そのまま直進して信号のない交差点にさしかかる。右折してならかな坂道を登っていくと、今度は乳白色がかった煉瓦造りの建物が見えてくる。黒い門灯とシックな正面扉、朱色の窓枠が目につく。上方には年代を感じさせる大砲のレリーフと ARSENAL STADIUM の文字。これがアーセナルの本拠地、クラブの事務棟とメインスタンドを兼ねたイーストスタンドである。

ヨーロッパ随一とも評される美しいサッカー場は、この建物の向こう側に広がる箱庭のようなピッチで紡がれている。おそらく初めてハイバリーを訪れた人は、イーストスタンドのあまりにもクラシカルな佇まいとのギャップに驚くのではないだろうか。

石造りの階段を上がり玄関に入る。大理石の床をあしらったエントランスホールに飾られているのは小さな胸像だ。表面が磨きこまれた胸像は、此処でアーセナルの歴史を見守り続けてきた。

そもそもアーセナルの設立は1886年に遡る。ロンドン市内の南部にあったイギリス

陸軍の兵器庫に勤める人々が、ダイヤル・スクウェアというチームを結成したのが発祥だった。「ガナーズ(砲兵)」の愛称や大砲を象ったエンブレムが、これに由来することはよく知られている。その後クラブは数度の名称変更とプロへの転向、ロンドンのチームとしての初のリーグ参加、現在の場所への移転などを経て地位を固めていくが、1920年代までは、ロンドンサッカー界の牽引役としての



Ichiro Miyahara

草サッカーで監督の経験もあるマイケル。「アーセナルも指導してみたい。悲惨な結末になるだろうがね(笑)」

最初に会ったのは、父親が1930年代にファンだったというマイケル・ドーラン。1967年からシーズンチケットを買っている、筋金入りのガナーズファンである。病院の事務職として長年勤務し、今はロンドン市内南部のトゥーティンク・ブロードウェイという駅のそばで、悠々自適の日々を過ごしている。インタビュウのためにわざわざ用意してくれたのだろう、マイケルが着ていた

黄色のシャツは、ファンの間では有名なレプリカユニフォームだった。手入れの行き届いた広めの庭では、幾種類もの草花が綺麗な花を咲かせていた。

「自分は1945年にリバプールで生まれたんだ。父親はアイルランド出身だったんだが、1920年代の終わりにリバプールに渡ってきてね。そこで母親と結婚して自分が生まれ、それからすぐにロンドンに越してきた。かわ

い子供がおかしな発音の英語を覚えないうちに、気を利かせてくれたんだ(笑)。ファンになったのは自然な成り行きだった。父親はアイルランドにいる頃からアーセナルのファンだったからね」

アイルランドと聞いて違和感を覚えた。アイルランドといえば、マンチェスター・ユナイテッドやリバプールを筆頭に、イングランド西部のクラブとの太い絆が指摘されるのが常である。アーセナルが人気があったというのは意外だった。

「1925年にチャップマンがきた後は、アイルランドでもアーセナルが一番人気があったんだよ。とにかく強かったし羽振りが良かったから、巷じゃ「Bank of England (国営銀行チーム)」と呼ばれていたらしい。昔のアーセナルは、他のチームで活躍した選手を誰でも買ってくるのができたんだ。現代に当てはめるなら、北西部のならず者チームみたいな具合さ。君らが言うところのオールド・トラフォードのチームのように、30年代はイギリスで最も国民から愛され、かつ目の敵にされるチームだったんだと思う」

歴史の本を紐解けば、マイケルの説明が誇張ではないことがわかる。アーセナルは1930年にFAカップで初優勝、翌年はイングランド南部のクラブとして初めて国内リーグを制覇する。33年からはリーグ3連覇、36年には2度目のFAカップを獲得するなど、他を圧倒する強さを誇っていた。当然、クラブは興行でも大成功を収める。テラス(立見席)式のスタジアムは、7万人ものファンでし詰め状態だった。

チャップマンは34年のシーズン半ばに急逝するが、30年代のアーセナルが繁栄を謳歌し続けたのは、偏に彼の功績によるものだった。「その通り、彼はまさに『イノベーター(改革者)』だったんだ。昔のリーグはプロといってもまだまだアマチュアだった。でもチャップマンはこれを本場のプロに変えていった



んだ。彼は試合の前に選手を選び、ちゃんと指示を与えるという「監督の仕事」を確立した。選手に筋力トレーニングをやらせた。3バックを本格的に使いだしたのもチャップマンだったと思う。センターハーフを後ろに下げて、それまでとはまったく違うサッカーをやったわけだ。

俗に言うWMシステムの登場である。当時は、まだ土のグラウンドで茶色の革製のボールを蹴りあい、ゴールキーパーが帽子をかぶってプレーしていた。フォーメーションも1-2-7から2-3-5へと進化してきてはいたが、およそ合理性とは縁遠いものだった。しかしチャップマンは、「ハーフ(2-3-5)の3に当たる選手、現在のMF」の中央をDFラインに下げると共に、5人のFWのうち、CFと左右両サイドを残して2名を中盤に下げるシステムを採用。結果、攻撃陣はW字型、守備陣はM字型の3-4-3を敷くこととなった。鉄壁の守備とすばやいカウンターの可能にしたフォーメーションは、アーセナルの得点数を激増させただけでなく、サッカー史上初の近代的な理論として、ヨーロッパ全土を震撼させたのである。

マイケルは続ける。

「チャップマンがすごいのはそこだけじゃないんだ。地下鉄の駅の名前を『グレスビー・ロード』から『アーセナル』に変えたのも彼だし、選手のユニフォームに背番号を縫い付けたり、スタジアムに時計や照明を取り付けるプランをひねり出したのも彼だった。要するに今の世の中で当たり前になっていることは、全部彼がやりはじめたってことなんだ」

チャップマンの改革はこれに留まらない。サッカー人気を定着させるべく、アーセナルに來る以前には国内リーグを統合。ユニフォームの胴体と袖の部分の色分けし、敵と味方の選手を差別化。ラジオによる実況中継。両チームのキャプテンが並んで入場する方式。PKの際に選手が近づき過ぎないようにするた

めの、ペナルティエリアに隣接する半円状のライン。これらはすべてチャップマンの働きかけによって実現したものである。彼はサッカーのプロ化と、エンターテインメントとしての質の向上を絶えず追求した。

チャップマンはさらに、代表チームの合同合宿の実施を主張したばかりか、ボールがゴールラインを越えたかどうかを見極める審判の導入まで進言している。これは今日も真剣

Ichiro Miyahara



「サッカー界の皇帝」ことチャップマン。彼の死から約60年後、改革者の系譜を引き継いだのがベンゲルだった

は彼らをどう見ているのだろうか？

「例のならず者チームじゃ、なんかバズビーが偉いってことになってるようだが、チャップマンの比じゃないと思う。チャップマンは、クラブやサッカー界そのものもマネージメントしてたんだから」

このようなチャップマンの「先進性(モダニズム)」が集約されたのが、新たなスタジアムだった。アーセナルは1913年にハイ

バリーに移転して以来、木造のスタジアムを使用してきたが、チャップマンの提案によりスタジアムの建設に着工。'32年にはウェストスタンド(バックスタンド)、『36年にはイーストスタンドが完成する。特にイーストスタンドは、その頃流行していた「アールデコ」の様式を採用したもので、ヨーロッパで最も美しく、そして最もモダンなスタジアムとして世間の注目を集めた。

1930年代に建設されたモダンなイーストスタンドは、ヨーロッパ文明にとっても最後のモニュメントであった。

ただし1930年代は、イギリスにとって必ずしも薔薇色だったわけではない。空には飛行船が飛来し、ラジオからはビッグバンドの演奏が流れ、ガルボやディートリッヒといった銀幕の女王が微笑みかけるようになった時代ではあったが、世界の盟主の座は新大陸に移りつつあった。ジャズや映画はもとより、パリで産声を上げたはずのアールデコにしても、ヨーロッパで流行したのはアメリカで人気を呼んだことがきっかけだった。

事実 1929年に発生した大恐慌は既にシティを直撃しており、ヨーロッパ本土からはナチスの不気味な軍靴の音も響いてきていた。そして'39年には、とうとう2度目の世界大戦が勃発してしまう。これと期を同じくしてリーグ戦は中断。アーセナルの黄金時代も幕を閉じることとなった。その意味でイーストスタンドとは、イギリスという国家やヨーロッパ文明そのものにとっても、旧きよき時代を偲ばせる最後のモニュメントであったといえるかもしれない。

再びマイケルに水を向ける。1930年代にチャップマンが体現していたモダニズムは、クラブの歴史全体を語る上でもキーワードになりうるのだろうか？

「そういっていいんじゃないだろうか。'30年代のアーセナルが未来を先取りしたチームだったことは間違いないし、ベンゲルがやっているサッカーだって魔法のようだろう？ 正直な話、わしに言わせれば『一体こりゃなんだ。同じサッカーか？』って感じた。自分が'70年代とか'80年代に見てきたのは、ロングボールを勢よく蹴りこんで、選手がひたすら突っ込んでいくだけの代物だったからね。席がスタジアムの真ん中にあるから、ひどい時には右のゴールを見て左のゴールを見てという繰り返しで、目の前——中盤でぜんぜんボールが見えないことさえあった(笑)。

アーセナルは1919年から下のリーグに落ちたことがない唯一のクラブなんだが、こんなクソみたいなサッカーをやっていた時期もある。でも96年にベンゲルがやってきて、それを全部終わりにしてくれたんだよ」

次にインタビュしたのはエイミー・ローレンスだった。大学で音楽を専攻した後にはサッカージャーナリストに転身。30代前半にして、高級紙「オブザーバー」で論陣を張る俊英である。生粋のアーセナルファンでもあり、スタジアムに程近い場所ですぐに人住まいをしている。油絵がさりげなく飾られた部屋は、彼女の趣味のよさをうかがわせた。

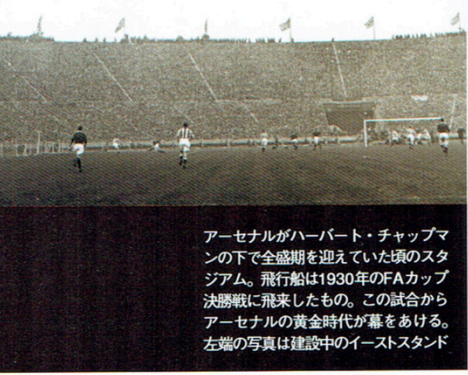
エイミーがまず解説してくれたのは、「バンク・オブ・イングランド」なる言葉に込められた含意だった。



ARLO FOTO AGENCY(4)



アーセナルがハーバート・チャップマンの下で全盛期を迎えていた頃のスタジアム。飛行船は1930年のFAカップ決勝戦に飛来したもの。この試合からアーセナルの黄金時代が幕をあける。左端の写真は建設中のイーストスタンド



憧れの目で見られてたし、チャンピオンズカップは1950年代まで開かれなかったから、イングランドのクラブがヨーロッパを象徴する存在になっていたの。おまけに当時はアーセナルの全盛期だったから、つまりサッカー・イングランド・アーセナルで、世界で一番有名なクラブだったわけ。今のレアルのような存在だったのね」

これはチャップマンが海外遠征に意欲的だったことも関係している。1930年にはパリ・ラシンと試合を行うなど、アーセナルはヨーロッパ大陸に真剣に注目した初のクラブでもあった。サッカーに革命を起こした偉人として、チャップマンはあらゆる訪問先で歓迎されたという。

「それに『バンク・オブ・イングランド』と呼ばれるようになった理由としては、地理的要因も大きいと思う。やはりイングランドの顔役であるためには、マンチェスターでもリバプールでもなく、ロンドンのクラブである必要性があったと思うから。親善大使としての役割も担われていたから、ドレスコードもかなり厳しかったの。サッカー選手である前に社会に通用する紳士であれというの、チャップマンの口癖だったはずだし」

選手たちが、スーツ姿でサッカーボールを抱えている光景が頭に浮かぶ。ではロンドンという都市の「体質」は、クラブの「文化」にどのような影響を及ぼしたのか。

「よく言われるけど、アーセナルのファンは控えめ——静かなことでも有名な。もちろんファンは興奮したりするけど、北のファンはもっと無邪気に大騒ぎするじゃない？ 同じ体質はクラブ側も受け継いでいるわ。たとえばベンゲルは、無敗記録を更新しているときも絶対にそのことを鼻にかけなかった。映画でいうならジェームズ・ボンドみたいなイメージかしら。大活躍しても決して派手にアピールしないで、『じゃ、失礼』とか言いながらスマートに立ち去っていく。これがア

「セナルのスタイルなのよ。きっと北のファンには気取つてるように見えるだろうし、ベンゲルはフランス人だから、彼が監督になつてからは余計にスノッソな印象が強くなつたんでしょけど、アーセナルは昔から『羨しいクラブだった』」

エイミーは、イングランド代表としての矜持と、ロンドンならではの洗練されたマナーが継承されていると主張する。

だが近年、イングランドサッカーの伝統を論じる際に引き合いに出されるのは、'50年代末以降のマンUやリバプールばかりである。「もしかすると、アーセナルは名声を確立するのが早すぎたのかもしれないわね。ラジオやテレビの番組で懐メロベスト100というのがあるけど、みんなが思い出すのはせいぜい10年前とか20年前までの曲じゃない?」どんなに大ヒットしたことがあっても、1930年代の曲には誰も投票しない。

'50年代末のマンUなんて、あるのはロマン(物語)だけで実績はゼロだった。でも彼らはそういうのをうまく利用して、チームを強く大きくしていった。逆にアーセナルは、だんだん地味なクラブになっていった。稼ごうと思えばいくらでも稼げるのに、よくも悪くも保守的な態度を貫いたのよ」

1950年代から'80年代まで、アーセナルは雌伏を余儀なくされる。この間、国内リーグを制覇したのは'53年、'71年、'89年の3度のみ。ちなみに'71年のタイトルは史上3チーム目となる2冠(リーグ&FAカップ)だったが、黄金時代の再現はならなかった。むしろ躍進したのはノッティンガム・フォレストやリバプールであり、マンUであった。クラブの勢力図は、'92年にプレミアシップが発足した後も変わらなかった。

「そう、マンUは時代の申し子になったし、儲けかたも桁外れだった。今でも予算だけをみれば、アーセナルとは1位と2位どころか、1位と6、7位くらいの差があるわ。」

だからアーセナルがリーグで優勝するのは、ライト級のボクサーがヘビー級のボクサーをKOするようなすごいことなのよ。ベンゲルは、お金ですべての片が付いてしまう世の中になつても大事なものがあつたということ、伝統やチームスピリット、アイディアこそ尊いんだってことを示しているわけ」

斬新なアイディアで道を切り拓いてきた点において、ベンゲルの姿はチャップマンと重なる。



Ichiro Miyahara

背景も社会もまったく違っているけど、一番重要なのは、どちらもサッカーを総合的に進化させたことなのよ。ベンゲルの場合は、アルコールを控える、肉類の代わりに炭水化物や果物を食べる、体を動かす前には十分ストレッチをする、メニューごとに時間を決めて練習する、といったことから改革したけど、7、8年前のイングランドでは衝撃的なことだったのよ。サッカーの歴史で、チャップマンとベンゲルほど大きなインパクトを与えた人はいないと思うわ」

「音楽に喩えればアーセナルはモダンジャズ、マンUはアイドルグループが歌うポップソングかな」とエイミー

先進性は必然的に影を潜め、格式は保守主義へと転じていく。かくして戦後のアーセナルは転落していったのである。

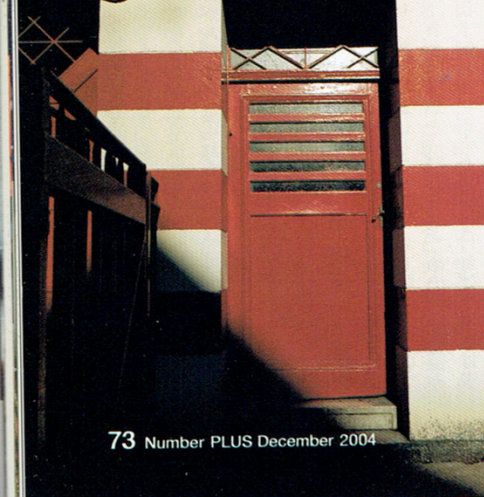
アーセナルの浮沈というテーマを考えると、きに示唆を与えてくれるのは、保守と革新のダイナミズムである。

1930年代、アーセナルは最もモダンなクラブであると同時に、最もオーソドックスな(格式ある)クラブであるという特徴を備えるに至った。

しかし、二つの相矛盾する要素を両立させることができるのは、チャップマンのような天才だけである。そのような人材を失えば先進性は必然的に影を潜め、オーソドックスは悪しき保守主義へ転じていくことになる。これがアーセナルの戦後の歴史だった。

伝統へのこだわりと、誰の目にも明らかな改革の必要性。不振が長引けば長引くほど、アーセナルは葛藤を募らせていく。そして迎えた'90年代前半、マンUがプレミアという新

イングランドで最も美しいとされるスタジアム。「マーブルホール」と呼ばれるメインフロアの正面に飾ってあるのがチャップマンの胸像。彼が造らせたイーストスタンドは、建物全体がアールデコの博物館のようになっている



たな波に乗って離陸し、アーセナルの格式そのものが脅かされ始めた時、ぎりぎりまで追いつめられた彼らは起死回生の手段に打って出る。それが無名の外国人監督、アーセン・ベンゲルの抜擢という策であった。掘入れしたのは副会長のデイビッド・ディーンだが、クラブ全体にとっても一か八かの大博打であったことは間違いない。

この賭けは見事に的中する。ベンゲルは、就任2年目となる'98年に2冠を達成。かくしてアーセナルのモダンイズムは鮮やかに甦ることとなった。蓋し、大胆な「革新回帰」を可能にしたのが保守的な組織だったというのはまさに歴史の妙だといえる。

エイミーは、ベンゲルが就任した後のアーセナルを次のように表現した。

「簡単に言えば、ヨーロッパで一番クラシカルなスタジアムで、一番モダンなサッカーをやるチームになった。社会学で言うところの『非同時代的なものの同時存在』は、やはり最大の魅力だと思うわ。しかも監督や中心選手はフランス人ですよ？ だからスタジアムがアルデコだっていうのは、案外、予定調和なのかもしれないわね(笑)」

最後に話を聞いたのは、ビック・エイカーズ。アーセナルのキットマネージャー(用具担当係)として、毎回1軍のベンチに入る人物である。プロのサッカー選手だった彼は、レディーズチームの監督も兼任している。

取材場所に指定されたのは、ロンドン郊外の北西部にあるトレーニング場だった。高速道路を走ること40分、一般道へ降りて標識もなにもない小道を抜けていく。モニターで監視している自動ドアが開くと、そこにはおよそサッカー関連の施設とは思えないような近未来的な建物が立っていた。

手始めに、'50年代から'80年代までのアーセナルをどう評価しているかを質問する。

「個人的には、それほどひどい時期だったと国籍化はとどまるところを知らない。最近ではブラジル人のシウバやスペイン出身のレジエスも加わった。外国人選手の登用に際しても、ベンゲルはイングランドサッカーをリードし続けている。

だがこの手法は大きな矛盾をはらんでもいる。主力選手の大多数が外国籍で占められているという事実は、イングランドで最も格式あるクラブ」という命題と真つ向から衝突するからである。外国人選手を積極的に登用させるアーセナルのモダンイズムが、もう一つのアイデンティティであるオールドクンシー(格式)を、逆に侵食し始めているのではないだろうか。

ビックはしばらく目をつぶった後、静かに口を開いた。

「外国人選手がアーセナルの伝統を受け継いだ、という解釈になると思います。具体例を挙げましょう。アーセナルには、全員が同じ袖の長さのユニフォームを着てプレーするという不文律がある。これはたとえばブラジルから来た選手であろうと、スウェーデン出身の選手であろうと変わりません。クラブの流儀には従わなければならないのです。英語をきちんとマスターすることや、常日頃の振る舞いに留意することなども同様です。アーセナルに加わった選手には、クラブの伝統に相応しい『紳士』になることが求められる。イナ(稲本)もそうでしたし、ティエリー(アンリ)も同じように成長してきました。彼はもはやフランス代表としてのティエリーではなく、あくまでアーセナルの一選手としてのティエリー・アンリに変身したからこそ、今日の姿があるのです」

別れ際、気になっていたことを尋ねる。2006年、アーセナルはエミレーツ・スタジアムに移転する。距離はハイバリーから数百メートルしか離れていないが、収容観客数は実に6万人を誇る。現行のスタジアムは3万8000人で頭打ちになっていたため、クラ

は思っています。クラブの成績は安定しませんでした。それぞれやむをえない事情があったのです。'50年代の栄光が持続しなかったのは高齢な選手が多かったからだし、'71年にダブルを成し遂げたチームの場合、その後、チームが成熟する前に選手が放出されてしまった。また、自分たちがいかに優れた選手をそろえても、他のクラブの戦力がそれを上回るケースはプロの世界ではよくあります



Kishio Miyahara(2)

ビック・エイカーズ氏は「ベンゲル監督が素晴らしいのは、人の意見に耳を傾ける柔軟性も持っている点だ」と語る

しかし成績の問題とは別に、戦後のアーセナルは明らかにサッカー自体の魅力に欠けていた。特に'80年代後半からは、悪名高い「Boring, boring Arsenal(退屈でつまらないアーセナルのサッカー)」という言葉も頻繁に使われるようになった。

「実際、ジョージ(グラハム)のチームはデフエンシブなサッカーを基盤にしていたの

で、ファンには不満が残ったかもしれません。でも彼はトップクラスのDFを育ててアーセナルに貢献しましたし、'89年にはリーグのタイトルもついている。これはアレックス・フアーガソンよりも先です。特に守備陣はイングランド代表の中軸も担いました」

皮肉なことに、アーセナルのサッカーが色褪せる遠因を作ったのも、誰であろうハーバート・チャップマンだった。

フォーメーションの主流が4-4-2に変わっても残存し、イングランドサッカーの後進性をもたらしてしまふ。この悪弊がクラブレベルで端的に現れたのが、'80年代後半のアーセナルだった。

チャップマンは一つの予言をしている。「デフエンスは目覚ましい発展を遂げ、完成の域に達した。この結果、今後サッカーが一種の膠着状態に陥っていくかもしれないという指摘も耳にしている。もし将来のサッカー界が、攻撃を成功させるための手段を編み出す知性や独創性を持たなければ、これは嘆かわしい結果をもたらすだろう」

チャップマンの予言は的中し、そして覆された。チャップマンの死去から約60年後、イングランドサッカーの呪縛を解いたのは、奇しくも同じクラブに招かれた監督だった。

チームの多国籍化が進む中、「オールドクンシー(格式)」というアイデンティティは、いかにして保持し得るのか。

ビックがアーセナルで働きだしたのは1987年。ベンゲルがアーセナルを変革していく過程をつぶさに観察してきたはずである。彼の目に改革はどう映ったのだろうか。

「アーセンは未知の方法論を持ち込みました。それは食餌療法から、選手をスカウトしてくる方法にいたるまで非常に多岐にわたります。たとえばこのビルを建てたのも、アーセンのアイディアによるものでした。一概に述べるのは難しいのですが、強い共通項を探すとすれば、世界各地で得た経験を活かしてきた点でしょうか。外国から選手を連れてきたのは象徴的だと思います」

ベンゲルはスコットランド人を除けば、イングランドでリーグやFAカップのタイトルを獲得した初の外国人監督である。しかも彼は、それをピエラ、アンリ、ピレス等のフランス人選手を軸に達成した。アーセナルの多

ブの関係者は歳入のスケールアップという点でも大きな期待を寄せている。

イーストスタンドは、日本の重要文化財に当たる「第2級建造物」の指定を受けているため、外観は保存されることになっている。しかしクラシカルなスタジアムと最先端のサッカーが同居する面白さ、さらに言えば、1930年代の雰囲気味わえるという魅力は永遠に失われてしまう。

「それは否定できないと思います。でも時代の流れには逆れませんし、サッカーのレベルを上げるために移転は不可欠でした。今のスタジアムはビッチが狭いので、選手はアウエーの試合で苦労していますから。」

ただし移転には、高くなりすぎたチケット代を下げるという密かな狙いもあります。そうすれば子供たちも、昔のように生でサッカーを観ることができるようになる。これはある意味で、チャップマンが生きていた頃のような状況を再現する試みだともいえるでしょう。新しい時代にも、アーセナルの持つ伝統は確実に受け継がれていくのです」

取材を終えて再びハイバリーを訪れる。チャップマンが改称させた地下鉄の駅。漆喰が落ちかけたフラット。乳白色のイーストスタンド。いつもと変わらぬ静かな時間が流れている。スタジアムの前の道路は丁字路になっている。そこもまた坂道だ。右に数百メートル下っていくと、もう新たなスタジアムの工事現場に突き当たる。楕円形のシルエットとまっすぐに伸びた幾本ものクレーンは、未来への進路を示す巨大な羅針盤のようだった。